

学会ニュース No.150

2025 年 4 月 30 日 全日本博物館学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學博物館学研究室内

E-mail : jimmu(a)museology.jp

*** 目次 ***

『学会ニュース』150 号の発行に寄せて……………1	役割を改めて考える……………6
【追悼】梅室英夫先生の逝去を悼む……………2	【紹介】海外のアクセシビリティの高いミュージアム
【会告】2025年度 第 52 回総会・第 51 回研究大会に	ーアメリカオリンピック&パラリンピックミュージアム (USOPM) の事例……………8
ついて……………3	【紹介】明治初期の金鯢の錦絵について……………10
2024年度 第 2 回研究会 開催報告 講演会「博物館と	委員会議事抄録……………12
福祉ー博物館での福祉的实践を読み解くー」……………4	会員情報……………12
2024年度 第 3 回研究会 開催報告 シンポジウム「大	
学が博物館を持つ意義」ー大学における附属博物館の	

『学会ニュース』150 号の発行に寄せて

この度、全日本博物館学会の『学会ニュース』は、創刊から 150 号目の節目を迎えました。

1973 年 8 月 18 日に國學院大學で開催された、全日本博物館学会設立総会・総会で産声をあげた本学会は、2023 年に創立 50 周年を迎えました。まもなく 50 周年の記念誌が出版される予定で、完成を楽しみにしています。本学会の半世紀にわたる博物館学研究における成果の多くは、1975 年 8 月に創刊された『博物館学雑誌』に掲載されています。一方、『学会ニュース』は、学会の広報誌的な役割を担い、雑誌に先んじて、学会創設の 5 ヶ月後の 1974 年 1 月に第 1 号が発行され、今回の第 150 号へとバトンが繋がってきました。

学会のメインイベントである年次総会や研究大会のご案内をはじめ、研究会等の開催報告、博物館を取り巻く内外のトピック的な情報、そして学会の委員会や会員動向等をお届けする内容で、総務をご担当いただいている委員の皆さんが持ち回りで各号の編集を担われ、現在年間に 4 号を目途に発行が続けられています。

昨今のデジタル化が進む世情の下で、ニュースについても、紙媒体からデジタル版での配信への切り替えの是非が委員会でも話題にあがり、現在では学会のホームページ上で公開し閲覧できるようになっています。当面の間は印刷版の配布も行っていますが、今後のあり方については引き続きの検討が必要と考えています。

いずれにせよ、NEWS という言葉の意味のごとく、新しい情報を、また、N (北)、E (東)、W (西)、S (南) が示すように幅広い地域や分野の情報を、迅速に的確に会員にお届けする『学会ニュース』の役割はこれからも重要です。編集を担う総務委員の皆さんのご努力に感謝申し上げるとともに、ニュースとしての内容充実のためには、広く会員の皆さんからの情報提供が欠かせません。

150 号の節目を迎えるに際し、充実したニュースの発行を続けるために、今後とも会員の皆さんのご協力をよろしくお願い申し上げます。

全日本博物館学会

会長 半田 昌之

【追悼】梅室英夫先生の逝去を悼む

全日本博物館学会の元委員、梅室英夫先生が去る3月9日に急逝された。東京都新島の農業振興のため、ベントナイトを用いた土壌改良を指導されている最中、一日の作業を終えて海辺の露天温泉に浸かりながら81歳の天寿をまっとうされたというのだ。生知安行、利他心に富んだ先生だからこそ天が導いた安楽の最期だったのだろう。

梅室先生は、千葉県のお生まれで昭和43（1968）年に東京農業大学農学科をご卒業後、母校に奉職され、農具学をご専門として長らく同大学の学芸員課程を牽引されてきた。その教え子は全国に散って活躍されていることは言うまでもない。令和4（2022）年から同大学の常設展示で公開されている古農機具（総計約3,600点）は、昭和43（1968）年から14年の年月をかけて全国から収集したもので、昭和36（1961）年の農業基本法の公布や農業の動力利用状

況を勘案し、1959年以前に使用されたものを古農機具と定義し、梅室先生が中心となって実施した事業である。また、昭和61（1986）年に執筆された『古農機具類作図テキスト』は、古農機具作図の基本テキストの嚆矢とも言える業績といえる。

全日本博物館学会には、発足当初の昭和48（1973）年の入会から平成25（2013）年の退会までの40年の長きにわたる会員歴の中で、昭和59（1984）年から昭和64（1989）年、平成6（1994）年から平成19（2007）年の都合23年間、総務委員と行事委員を歴任され、学会運営に多大なる貢献を頂戴した。

さて、これまで公私共にお世話になってきた梅室先生のお人柄であるが、一言でいえば“温厚”。喜怒哀楽の“怒”の字がなくて、常に人のことを考えて行動しているといったイメージだ。亡くなるまで、進化生物学研究所研究員の他に、全日本家禽協会理事、NPO法人環境教育推進協議会農活研究所長、NPO法人チームタネガシマ主任研究員、新島博物館館外研究協力委員などの社会貢献を引き受けられていたのも利他心のなせるところ。元新島村博物館学芸員の北村武氏によると新島の農業振興は、全くの手弁当で年に3回から5回は、農大の学生を率いて指導にあたっていたという。実験が成功し、これからという時にと電話口で声を詰まらせておられた。

私的には渋谷の國學院と世田谷の農大とは然程遠くないこともあって、ことある度にお声がけいただいた在りし日が懐かしい。今も「食と農の博物館」の入り口に置いてあるシーラカンスのレプリカ製作を頼まれたのも先生からだ。先生からは博物館学の薫陶はもとより、初夏には校内のヤマモモが色づいたというお知らせや、大根踊りで有名な秋の収穫祭にも度々招かれ、クリスマスには烏骨鶏を漬けたからと校内の実習場所である農業資料室に伺えば、現役の学生や教員、OBが集って賑やかな宴が繰り広げられていた。最近では、進化研にも時々お邪魔して家庭菜園のコツを教授して頂いたり、鶏糞や化成肥料も頂戴し、まだ使えるという古い小型耕運機は、ご自身の軽トラックでわざわざ拙畑まで運んで下さったのが形見になってしまった。また一人公私ともにお世話になった大好きな先生が旅立たれた。合掌。

（内川隆志 國學院大學）



ありし日の梅室英夫先生

（1987年度 全日本博物館学会第14回総会にて）

【会告】2025年度 第 52 回総会・第 51 回研究大会について

全日本博物館学会
会長 半田 昌之

全日本博物館学会 2025 年度 第 52 回総会・第 51 回研究大会を、下記の通り 2025 年 7 月 5 日（土）・6 日（日）に國學院大學渋谷キャンパスにおいて開催いたします（ハイブリッド開催）。会員諸氏には奮って大会にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

なお本大会の最新情報については、順次学会ウェブサイトにて掲載いたしますので、ご覧いただきますようお願い申し上げます。

記

会 期：2025 年 7 月 5 日（土）・6 日（日）

会 場：國學院大學渋谷キャンパス 学術メディアセンター 1 階 常磐松ホール及び多目的ホール
（〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28）

主 催：全日本博物館学会

協 賛：國學院大學（予定）

会場へのアクセス：渋谷駅（JR 各線・地下鉄各線・東急各線・京王井の頭線）から徒歩約 13 分

都営バス（渋谷駅東口バスターミナル 54 番のりば 学 03 日赤医療センター行）

「国学院大学前」下車（所要時間約 10 分）

恵比寿駅（JR 山手線・埼京線・湘南新宿ライン、地下鉄日比谷線）から徒歩約 15 分

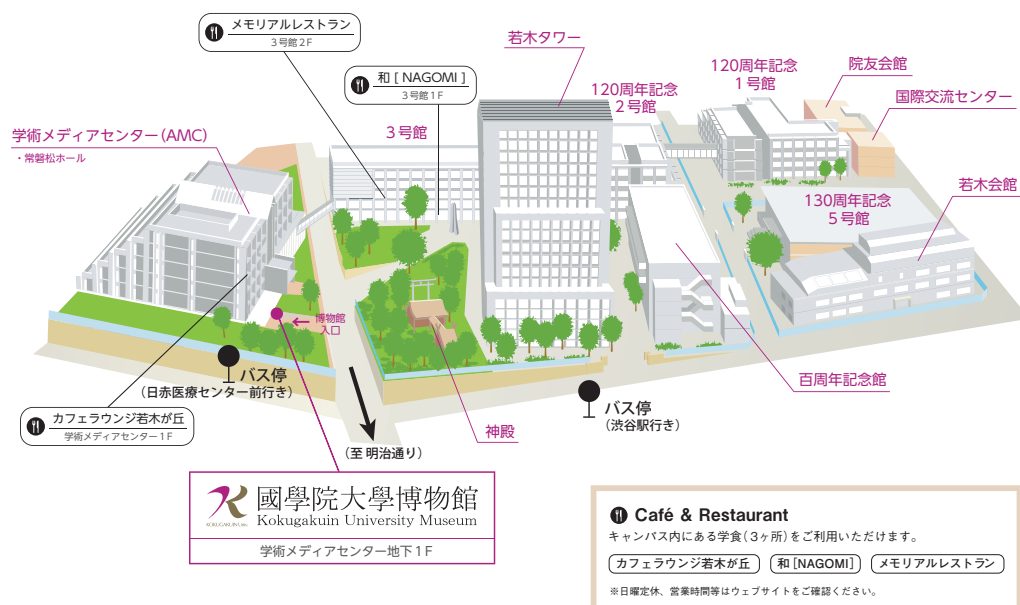
都営バス（恵比寿駅西口ロータリー 1 番のりば 学 06 日赤医療センター行）

「東四丁目」下車（所要時間約 10 分）

連絡先：全日本博物館学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28 國學院大學博物館学研究室内

E-mail：jimu(a)museology.jp



2024年度 第2回研究会 開催報告
講演会「博物館と福祉—博物館での
福祉的实践を読み解く—」

2025年2月9日（日）、本会主催の第2回研究会がオンラインで開催されました。本研究会は、2024年度学会賞受賞記念を兼ねた菅井薫氏による「博物館と福祉」をテーマとしたご講演でした。休日の夜にも関わらず、70名を超えるご参加をいただきました。ここに講演概要および当日の質疑応答含め、演者からご寄稿いただきましたので、掲載いたします。

（並木美砂子 帝京科学大学）

1. 当日の講演概要

講演内容は、拙稿「博物館における福祉的实践をめぐる理論的視座—本質主義と適応主義の対立を越えて—」（『博物館学雑誌』第49巻第1号所収）の核となる論旨、事例をもとに構成した。

（1）講演の構成

講演内容は3段階に分け、第1段階では、①参加者のご関心、②研究の原点とねらい、③福祉が意味する範囲について前提を共有した。第2段階では、「博物館は何のためにあるのか」という認識論、「博物館はどのような価値をもつのか」という価値論の構造（図1）を紹介した。あわせて、福祉的实践を読み解くための社会福祉の視点を理念、政策・制度、実践に分けて示した。第3段階は、結論・考察にあたる部分である。①博物館がなぜ福祉的实践を行っている／いたのか、②博物館は福

祉的实践にどのように関わっている／いたのか、という問いへの応答とともに、本質主義⁽¹⁾と適応主義⁽²⁾（「博物館は何のためにあるのか」という認識論）の対立を越えた実践理解のあり方を提起した。

（2）参加者のご関心と講演で目指したこと

講演会お申込みにあたっての事前アンケートでは、次の2点の質問に答えていただいた。第1は、『「博物館と社会福祉の接点（となる活動）」といったとき、どのような実践をイメージしますか？』。第2は、『「博物館と社会福祉の関係」について、どのような関心をお持ちですか？』という質問である。いずれの質問も、講演を聞いていただくだけではなく、参加者ご自身がもつイメージを事前に言語化していただくことを目的とした。

1点目については、ウェルビーイング（Well-being）やバリアフリーに関わる取り組み、アウトリーチや障害者への合理的配慮といった回答がみられた。当然のことながら、イメージされる実践例は幅広いものであった。しかしながら、限られた時間の中で満遍なく事例を取り上げることは「帯に短し襷に長し」となることは明らかであった。そこで、講演ではこれまで紹介されることが少なく、ソーシャルワークの視点と重なる事例⁽³⁾を取り上げることとした。

2点目については、来館者（少数）への働きかけにとどまらない博物館活動の可能性を探るための方法や考え方を知りたいといったニーズが寄せられた（表1）。そこで講演では、博物館と福祉のつなぎ目をそれぞれの領域の考え方（理論）や実践からみつけることを目指した。

（3）講演の要点

博物館における福祉的实践について、本質主義と適応主義という二項対立化した観点を超えて、新たな視座を

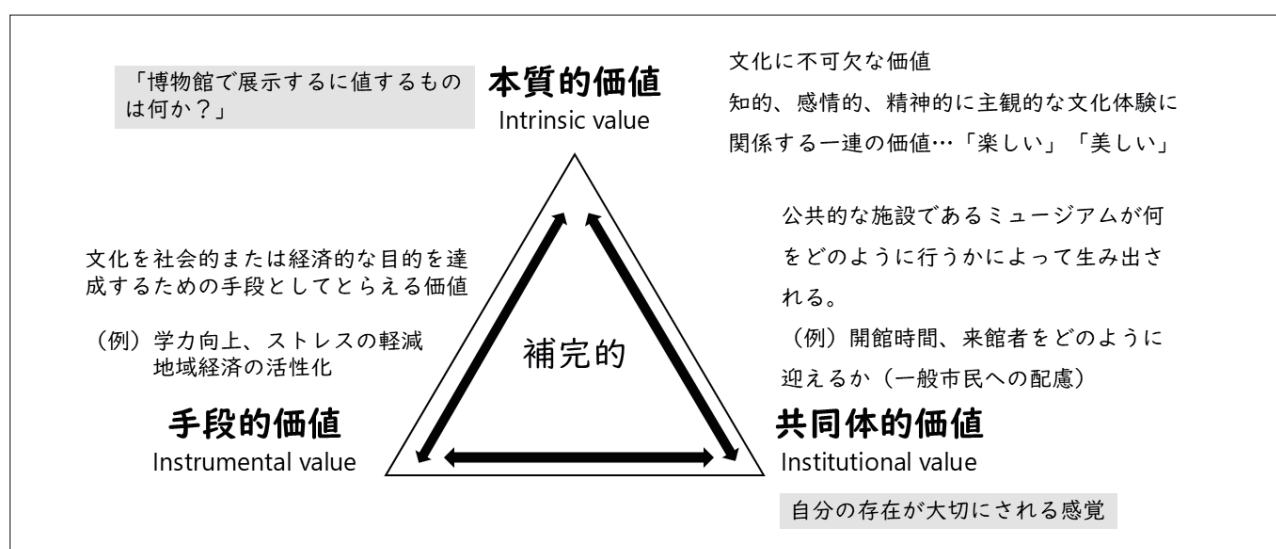


図1 博物館をめぐる価値論：文化的価値の視点

Holden（2004, 2006）をもとに筆者が一部改変して作成

表1 「博物館と社会福祉の関係」についての関心
(事前アンケートの一部を抜粋し、筆者作成)

- ・博物館の資源や特色を活かしながら（博物館の良さを残しながら）社会福祉にどのように貢献できるのか、具体的な方法や考え方。
- ・博物館の社会的な価値の創出—福祉を設立意義としている館や専門の人材がいる館以外で、もっとボーダレスな意識や指針の共有。
- ・個別の少数への働きかけをこえて、社会の福祉につながる博物館の営みの可能性。
- ・全ての人が訪れやすい博物館—社会福祉との関係から概念を考えたい。

提示することが本講演の要点であった。福祉的实践が外部からの圧力として捉えられる批判や、博物館の政治化を懸念する声に応答するため、理論的背景を整理し、具体的な事例分析を通じて議論を展開した。

結論で示したことの一つは、博物館（の基礎）活動との接点を具体的に見出さない限り、批判や懸念は払拭できないという点である。さらに、二項対立化した視点を打開するため、博物館の伝統的機能と福祉的实践が融合する新たな可能性（「共事者」（図2）としての博物館）を提起した。

2. 講演を終えて

講演会には、学会内外から博物館関係者に限らずご参加をいただけたようである。参加者から事後にいただい

たコメントでは、「共事者」というキーワードをそれぞれに意義づけ／意味づけてくださった方が多かった。この結果は、異なる領域に見える「福祉」に博物館がどう関わっていけばいいのか、模索の途上にあることを示唆しているのかもしれない。当事者—非当事者の二項関係で社会をとらえる限り、どのような営みも閉じたものになりかねない。

博物館が社会変革のアクターとなるために、私自身も実践と研究を通じて、博物館の価値と関わりを語る「言葉」を引き続き見つけていきたい。また、博物館研究を志す者として実践の灯火となることを意識していきたい。末尾ながら、学会賞受賞の光栄に浴し、講演会という身に余る機会をいただいたこと、参加していただいた皆様に感謝申し上げたい。

註

- (1) 博物館は、保存、研究、展示といった「内部」の機能のためにあるという考え方である。そのため、博物館は変化や発展に左右されない恒久的な本質を持っているとする。
- (2) 博物館は、施設の「外部」の人々のためにあると考える。急速に変化する世界に適応し、自分たちは何のために存在しているのかという問いに対して、より良い答えを導き出すため、理想を再構築する。
- (3) 具体的には、①エンパワメントの萌芽ともいえるハルハウス「労働博物館」での活動、②ソーシャルアクションにつながるアナコスティア近隣博物館の活動、③コレクションを用いて複数の価値を相互に生み出したミルウォーキー美術館の活動を紹介した。

(菅井薫 大阪市立自然史博物館)

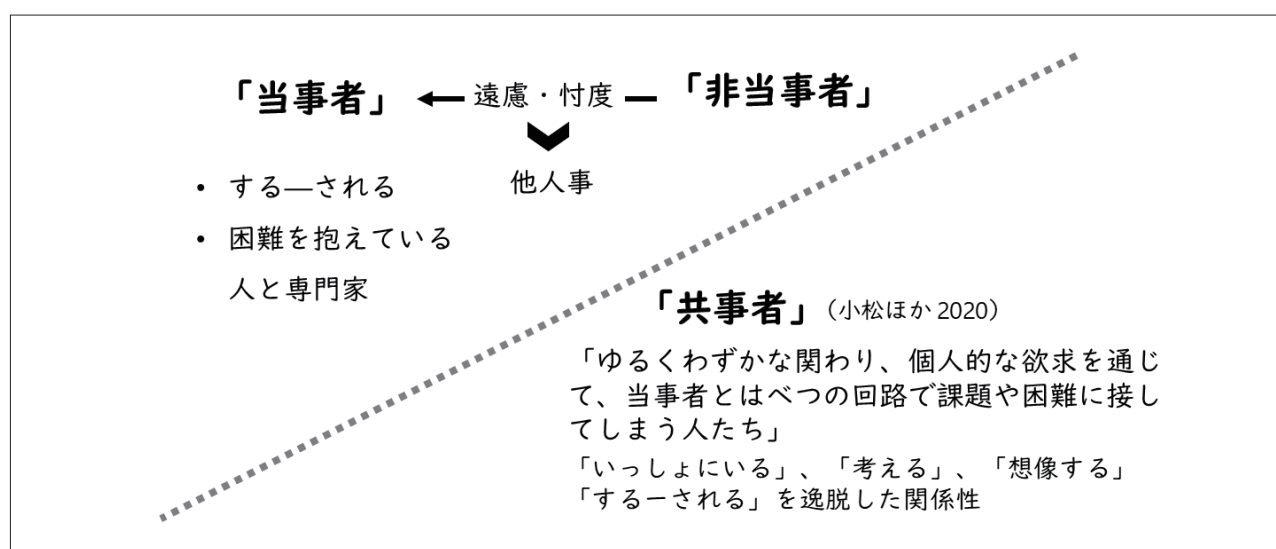


図2 「共事者」としての関わり方

小松ほか(2020)をもとに筆者作成

2024年度 第3回研究会 開催報告
シンポジウム「大学が博物館を持つ意義」
—大学における附属博物館の役割を改めて考える—

開催日：2025年3月6日（日曜日）午後1時から4時
 会 場：東京国立博物館黒田記念館（東京都台東区上野公園13-43）
 対 象：博物館関係者、大学学芸員課程関係者、博物館・水族館に関心のある人
 主 催：全日本博物館学会（2024年度第3回研究会）、
 大学博物館シンポジウム実行委員会（幹事：西源二郎）
 参加者：会場参加39名、オンライン参加申込72名、合計111名

はじめに

筆者が永く勤めていた東海大学海洋科学博物館（静岡市清水区）が、2024年10月で閉館になり、建物の撤去が予想されている。大変残念に思い、地元住民の方や東海大学海洋学部同窓生と相談して、同年11月に「東海大学海洋科学博物館を残す会」を立ち上げて、存続の署名活動を始めた。残す会の活動は、地元の静岡ではいくつもの報道機関に取り上げられ、多くの賛同を得ていたが、さらに幅広い支持を得ることが重要だと思われた。また、存続活動を進める中で、同博物館の運営は経済的にはマイナスであるが、大学志願者の獲得や大学のブランド力の向上など、大学にとって重要な役割を果たしていることを実感した。

大学附属博物館は、研究成果の保存展示や学芸員実習の場としての役割は論じられてきたが、大学への志願者募集の段階で博物館がどれくらいの役割を果たしている

のか、また、大学の経営戦略の中で附属博物館をどう位置付けていくのかなど、大学博物館の現状については、あまり明らかになっていない。そこで、大学博物館についてのシンポジウムを開くべく実行委員会を組織して、会場の確保と後援について、当学会の何人かの委員の方に協力をお願いした。その結果、幸いにして学会からの賛同をいただくことが出来た。特に栗原祐司委員から強いご支援を受けて、会場の確保と開催形態を当学会とシンポジウム実行委員会との共同主催という形にしていたことが実現した。

プログラム

13:00	開会あいさつ：栗原祐司
13:05～13:50	日本の大学博物館について 栗原祐司（全日本博物館学会委員）
13:50～14:20	東海大学海洋科学博物館の存在意義 西源二郎（元東海大学海洋科学博物館）
14:20～14:30	休憩
14:30～15:00	明治大学博物館の事業展開—大学の経営戦略との整合性について— 外山徹（明治大学博物館）
15:00～15:55	総合討論 座長：半田昌之（全日本博物館学会会長）
16:00	閉会あいさつ：西源二郎

シンポジウム

まず、栗原祐司氏（国立科学博物館副館長）より「日本の大学博物館について」講演が行われた。日本の大学博物館の数は、概ね250館程度で、その多くが入館無料であり、大学の研究成果を広く公開する役割を果たしていること、大学博物館に関する全国的な組織は、大学博物館等協議会、全国大学博物館学講座協議会（全博協）、全国大学史資料協議会の3団体があるが、大学博物館等



シンポジウム 会場風景



シンポジウム 講演の様子

協議会は国立大学中心、全博協は学芸員養成課程を有する私立大学中心、全国大学史資料協議会はアーキビストが中心で、大学博物館を網羅する組織はないこと、改正された博物館法において、十分な議論がなされないまま、公私立大学の博物館は登録博物館の対象となり、国立大学の博物館は対象外のままで、法令上、大学博物館全体としてのバランスが歪んでしまった可能性があること、さらに、290の大学等の学芸員養成課程の多くは考古学・美術史系博物館を中心とするカリキュラムになっており、自然史系博物館向けのカリキュラムを組んでいる大学は少なく、博物館学の専任教員が少ないこと、などが報告された。

次いで筆者が「東海大学海洋科学博物館の存在意義」について報告した。1970年開館の同博物館は、水族館部門、科学博物館部門、研究所で構成される海に関する総合的な科学博物館で、地元の市民からは「三保の水族館」として親しまれていたこと、同博物館には教員3名、学芸員11名が所属し、博物館の運営と共に海洋学部の学芸員養成（毎年60～80名）、卒業研究（毎年10～15名）などを担ってきたこと、海洋学部の定員は1975年では6学科2専攻680名（内生物系160名）であったが、2022年には3学科2専攻、350名に減少し、生物系2学科が200名で半数以上を占めており、この2学科の入学者のかなりの部分が水族館への就職希望者であり、同博物館の存在が大きな要因になっていること、毎年10名前後が水族館に就職しており、卒業生の活躍も目覚ましく、美ら海水族館をはじめ全国の13館（日本動物園水族館協会50館）で館長を務めており、大学のブランド力向上に貢献しており、同博物館が大学志願者募集において大きな役割を果たしていること、などを報告した。

最後に、外山 徹氏（明治大学博物館学芸員）より「明治大学博物館の事業展開 ―大学の経営戦略との整合性について―」の講演が行われた。明治大学博物館

は、2004年に刑事博物館（1929年設立）、商品博物館（1951年設立）、考古学博物館（1952年設立）という3つの博物館が統合され発足した。1990年代に大学における生涯教育事業が活性化し、大学の機能は従来の「教育」「研究」に「社会貢献」が加わり、2004年に始まった大学認証評価において、同学博物館は生涯教育の部署として「特記すべき長所」という評価を受け、入館者数も2019年度には10万人を超えるに至ったこと、その後、高齢者層の利用減少が顕著となる一方、大学としても在学生サービスの向上が課題となり、従来、館蔵品の専門分野に限定される傾向にあった学生教育について、学部・学科の別を問わない教養教育への寄与を方針とするようになったこと、少子化が進む私大経営の厳しい状況下で、付属博物館に経営的な感覚を求める視線が年々顕著になっているなか、大学が社会的評価を得る上で、研究成果の社会還元や収蔵資料の公共的利用を促進させることが効果的であること、付属博物館存続の拠り所として大学の経営戦略に沿うものとしてアピールし、大学の事業計画や教育ビジョンの策定に際し、博物館の役割を積極的に位置付けてゆくことが必要であること、などが報告された。

講演終了後に、半田昌之氏（全日本博物館学会会長）を座長として、総合討論が行われ、会場参加者から講演についての質問がなされるなど、活発な議論がなされた。

終わりに

東海大学海洋科学博物館存続の署名活動終了の目途を3月末としていたことから、シンポジウム実行委員会を組織してから開催までが2ヵ月半、参加募集期間が1ヵ月という短期間になり、「緊急開催！」となった。シンポジウムの構成としては、まず、大学博物館の概要が示され、東海大学の「水族館」という大学博物館としてはかなり特殊な例と、明治大学博物館というオーソドックスな例という対照的な2例を示すことができ、バランスの取れたシンポジウムになったと思われる。当学会とシンポ実行委との共同主催になったので、参加対象を学会会員に限定せず博物館に関心のある人に広げた。最終的な参加者のうち、学会員は会場参加39名中16名、オンライン参加申込72名中28名で、会員以外の参加者の方が多く参加する結果となった。今後、当学会への入会者増加につながれば、望外の喜びである。

なお、本シンポジウムにおいてオンライン配信を担当して下さった葛西臨海水族園ボランティア（TSV）の青木和輝氏にお礼申し上げる。



シンポジウム 総合討論

（写真左から、半田昌之座長、栗原祐司氏、筆者、外山徹氏）

（西源二郎 元東海大学海洋科学博物館）

**【紹介】 海外のアクセシビリティの高い
ミュージアム—アメリカオリンピック &
パラリンピックミュージアム (USOPM) の事例—**

コロナ禍で様々な困難に直面しながら開催された東京2020オリンピック・パラリンピック(以降、東京2020大会)の大会レガシーの大きな一つに D&I (多様性と包摂) を備えた社会の実現を目指した取り組みがあり、この取り組みが大会レガシーとして日本国内で継承・発展されていくことが期待されている。一方で 2025 年 1 月、アメリカ合衆国のトランプ大統領が連邦政府の DEI (多様性・公平性・包摂性) プログラムを全面的に廃止する大統領令に署名した。この動きは DEI の行き過ぎた取り組みに対する反動であることや多様性の形骸化を避けるといった捉え方があり、賛否両論を巻き起こしている。そして、この動きを受け、21 の国立博物館と美術館を運営するスミソニアン協会は連邦政府から多額の資金提供を受けていることから、来館者のアクセシビリティを確保する取り組みについては維持しながらも、この DEI 廃止の大統領令に従うことを表明し、DEI にまつわる部署を閉鎖することを発表した。今後この動向については注視していく必要があるが、その DEI の理念を体現した博物館が近年アメリカに誕生している。

その博物館とは 2020 年 7 月 30 日にアメリカ合衆国コロラド州コロラド・スプリングス市に誕生したアメリカオリンピック & パラリンピックミュージアム (以降、USOPM) であり、当博物館にて 2025 年 2 月に筆者の勤務先である日本オリンピックミュージアムが加盟しているオリンピックミュージアムネットワークの総会が開催されたことからその際の視察結果について報告していきたい。

USOPM の運営組織と立地環境

現在までオリンピックとパラリンピックの両方を統括し、国レベルで統合しているのはアメリカ、南アフリカ、オランダ、ノルウェーのみで、USOPM はアメリカオリンピック・パラリンピック委員会 (以降、USOPC) が運営する、世界で初めてオリンピックとパラリンピックが融合した博物館である。

運営者である USOPC は、アメリカオリンピック委員会 (AOC) として設立され、1960 年代からアメリカ合衆国オリンピック委員会 (USOC) に、2019 年に現在の USOPC に名称を変更し、パラリンピック名称を含めた世界初のオリンピック委員会となった。USOPC は連邦内国歳入庁 (IRS) が認定する非営利法人であり、原

則として連邦予算を受けず、寄附金、IOC から分配されるテレビ放映権料、スポンサー料等により活動している。USOPC に対する寄附金は、免税措置の対象とされ、USOPC は、利益のための事業を行うこと、株式を発行すること、政治的活動を行うこと等を禁じられている。USOPC 理事会の構成員の 3 分の 1 以上が、アスリートによって選出されたアマチュアスポーツ選手で、20% 以上が現・元アメリカ代表選手である。

また、USOPC は 1978 年にコロラド州コロラド・スプリングス市を本拠地として定めている。それ以前はニューヨークに置いていたが、アスリートに対するトレーニングやサポートの環境を整えることを目的にコロラド・スプリングス市に移転させた。そして、この本部の近くにオリンピックトレーニングセンターを設立し、現在多くのアスリートたちが高いレベルでトレーニングを行うための重要な拠点となっている。このような環境下であり、コロラド・スプリングス市はスポーツを特色とした観光街づくりを進めており、2013 年にコロラド州における地域観光法における還付税として 30 年間で 1 億 2,050 万ドルを獲得することを目指すプロジェクトの一環で USOPM が 2017 年 6 月に着工された。

USOPM の概要

USOPM の年間来館者数は 2021 年に 11 万 5,000 人に達し、建築面積は約 5,574㎡と広大である。CEO にはスミソニアン協会の収益部門の代表を務めた人物が、運営の責任者にボルチモア国立水族館やバップファロー科学博物館で戦略的および運営的リーダーシップを発揮した女性のリーダーが抜擢されている。その他にもマーケティングや施設管理、来館者体験、デジタルコンテンツ、アーカイブ専門の人材が配置されている。

館内はパラリンピックとオリンピックのアスリートたちが建物の設計に関わったインタラクティブ性の高い展示スペースに最先端の劇場、ミュージアムショップ、カフェ、スタジオを備え、そのコンセプトには、運営組織である USOPC のコンセプトが重ねられている。そのコンセプトはオリンピックおよびパラリンピックの歴史、精神、アスリートたちの功績を称えることにあり、具体は以下の通りである。



USOPM の外観

- ・アスリートの物語の共有：アメリカのオリンピックおよびパラリンピックのアスリートたちの個々の物語や経験を紹介し、彼らの努力や成果を称賛することを目的とする。
- ・教育と啓発：来館者に対して、オリンピックおよびパラリンピックの理念や価値、スポーツの重要性について教育を行い、より広範な理解を促進する。
- ・インタラクティブな体験：さまざまなインタラクティブ展示や体験を通じて、来館者がスポーツの楽しさや挑戦を実感できるように工夫する。
- ・多様性と包摂性の促進：パラリンピックに代表されるように、すべての人々がスポーツに参加し、活躍できる環境を促進することを重視する。
- ・コミュニティとの連携：地域コミュニティや学校との連携を通じて、スポーツの価値を広め、次世代のアスリートの育成を支援する。

USOPMの展示及び展示動線

先の通り、展示においても自国のアメリカ代表選手の功績を讃えることに主眼が置かれ、オリンピックとパラリンピックを融合させた12のフロア展示で構成されている。1つは巡回展フロア、残りは常設フロアで、これらのフロアが物語の弧を描くように配置されており、来館者はまず大会の歴史について学び、次にアスリートのトレーニングや準備、そして、6つのインタラクティブな競技体験や大会セレモニーを体験し、報道におけるメディアの役割についても探るものとなっている。また、来館者自身の故郷や母校に焦点を当て、その地域にゆかりのあるアスリートを見ることができるフロアもある。館全体で260点を超える展示数で、主に聖火トーチや入賞メダル、アメリカ国内で開催されたレークプラシッド1980冬季大会の競技会場のスコアボード、選手の競技アイテムなどが展示されている。

USOPMはインクルーシブな考え方を根底としているため、すべての来館者のアクセシビリティを最大限に高めるため、ユニバーサルでインクルーシブな設計要素を多分に取り入れている。例えば、来館者は入館時に音声解説



アクセシビリティの高い展示動線



(左) 映像コンテンツに組み込まれた手話

(右) 高さの調節可能なアーチェリー競技体験

付きビデオやテキストの読み上げ、コントラスト、フォントのサイズなど、好みのサービスを選択し、登録することが可能で、音声による説明を選択した場合には、各展示フロアに入ると、床の触覚ストリップによって自動音声による説明が起動する仕掛けとなっている。その他にも画面操作を支援する触覚キーパッドが装備され、全ての映像コンテンツにテロップとアメリカ手話が含まれている。そして、すべての展示フロアが車椅子でのアクセスが可能で、博物館全体に緩やかな傾斜のスロープが設置されている。

結びに

日本国内において、今年は大阪・関西万博の開催に注目が集まっているが、スポーツに目を向けると東京2025世界陸上および東京2025デフリンピックが開催される予定である。東京都はそれら大会に向け、予算を増額させ、誰もが芸術文化に触れることができるよう、都内の博物館に呼びかけ、アートプロジェクトの展開や鑑賞サポート付きの展覧会を増やし、アクセシビリティ向上に資する取組の推進に注力している。この流れは紛れもなく、「多様性と調和」を大会理念の一つに掲げ「共生社会」を目指した東京2020大会の開催に端を発している。開催都市であった東京都も「障害者がスポーツに親しみやすい環境整備」や、「障害の有無にかかわらず互いを尊重し支え合う共生社会の実現」といった有形・無形の両面でのレガシーを確実に継承し、現在に至っている。このような流れからも、誰もがアクセスできるアクセシビリティの高さをいずれの博物館も備えていることは近い将来においてはもはや当然という時代がきているといえる。

参考文献

「Inside the United States Olympic & Paralympic Museum」
<https://blooloop.com/museum/in-depth/us-olympic-and-paralympic-museum/> (参照 2025-03-22)

(下湯直樹 日本オリンピックミュージアム)

【紹介】明治初期の金鯢の錦絵について

日本の博物館の始まりとなる明治5年（1872）の文部省博覧会において、名古屋城の金鯢が展示の目玉になったことは博物館史上つとに有名な話である。その文部省博覧会関係の錦絵もさまざまな図案が存在する。その一つと目されているものに、「尾張國名古屋城天守之金鯢」と題する錦絵がある。

図1に示す通り、鯢一体が描かれ、加藤清正により造られたこと、明治4年名古屋藩により政府に納められたことのほか、その造りが寸法と共に以下のとおり記されている。

尾張國名古屋城

天守之金鯢

慶長年間加藤

清正造之明治

四年辛未名古⁽¹⁾

屋藩ヨリ之ヲ

官ニ納ム全體

金ヲ以テ包ミ

眼球并齒ハ銀

ニシテ瞳ハ赤

銅ヲ以テ造ル

高サ八尺七寸

尾ノ開キ五尺四寸

胴ノ周リ七尺三寸

胸鰭ノ開キ四尺一寸

腹鰭ノ開キ二尺五寸

眼ノ径リ一尺

頭ノ高サ三尺

鼻ノ幅二尺六寸

さてこの錦絵であるが、管見の限りでは4点の存在を認めることができる。

まず1点が尼崎市立歴史博物館の所蔵⁽²⁾で（以下、尼崎資料とする）、もう1点はアドミュージアム東京に所蔵されている⁽³⁾（以下、アド資料とする）。さらに1点が西尾市岩瀬文庫所蔵の折帖（画帖仕立）の『肖像等古画集』に収められている⁽⁴⁾（以下、岩瀬資料とする）。

そして最近筆者が入手に至り、それが図1に示したものである（以下、國學院資料⁽⁵⁾とする）。そのため少なくとも4点の「尾張國名古屋城天守之金鯢」の存在が確認されることとなった。ただ、図案自体は基本的に同じものでありながら、押された印が異なっていたり、ま



図1 錦絵「尾張國名古屋城天守之金鯢」

た岩瀬資料に至っては印が押されず画帖仕立となっていたりと、事情が異なる。つまり、図案が同じ錦絵でも異なる資料ということになるのだ。

以下、それぞれ解説のもと比べてみたい。

尼崎資料は、「博覧会事務局」という印が、右下枠内に朱で押されている。「博覧会事務局」の朱印が押されるのは尼崎資料のみである。

アド資料には左下枠内に「博物局」の朱印が押されており、それ以外の押印は見られない。

そして國學院資料では、「博物局」と「定價壹錢五厘」という朱印が枠外左下隅に押されている。前者は長円形、後者は長方形の枠内に記される。さらに右上隅には「版權所有」という黒印（墨印）がある（図2）。



図2 國學院資料

(左)「博物局」「定價壹錢五厘」

(右)「版權所有」

このように「博覧会事務局」と「博物局」という異なると言えば異なる部署の印が押されているのである。

そもそも「博覧会事務局」と「博物局」の存在時期であるが、順を追うと、明治4年(1871)9月25日に文部省内に「博物局」ができ、続いて明治5年2月8日(1月説あり)に「博覧会事務局」ができて、明治6年の山下門内博物館の開館(4月15日)直前(3月19日)に「博物局」が「博覧会事務局」に併合されていくということになる。そして「博覧会事務局」は明治8年3月30日に「博物館」と改称。さらに同年5月30日には「第六局」、翌9年1月4日に再び「博物館」となって、さらに同年4月17日に「博物局」になるという目まぐるしい名称変更があった⁽⁶⁾。

ということは、尼崎資料は明治5年から8年までの間に印が押されていることになる。

そして錦絵そのものの年代の根拠として大きく意義を果たすのが岩瀬資料である。所収される『肖像等古画集』は、岩瀬文庫のWebサイトにおいて「日本の歴史上の人物の肖像古画等を模刻した一枚刷を合綴したもの。詳細は不明ながら、明治5年3月より東京湯島聖堂大成殿に於て、文部省博物館が催した日本初の博覧会に出された展示品の解説刷物らしい。」とあり、明治5年の文部省博覧会に関する資料群である可能性を示しているのである。ということは明治5年に金鯢の錦絵は存在したと考えるのが妥当かもしれない。

ただし國學院資料の「版權所有」という印の存在によりまた別の事情も浮上する。

そもそも「版權」という言葉は明治8年(1875)の出版条例の改正時において法令上に定められた⁽⁷⁾。したがって明治8年以降の可能性も浮上するのだ。

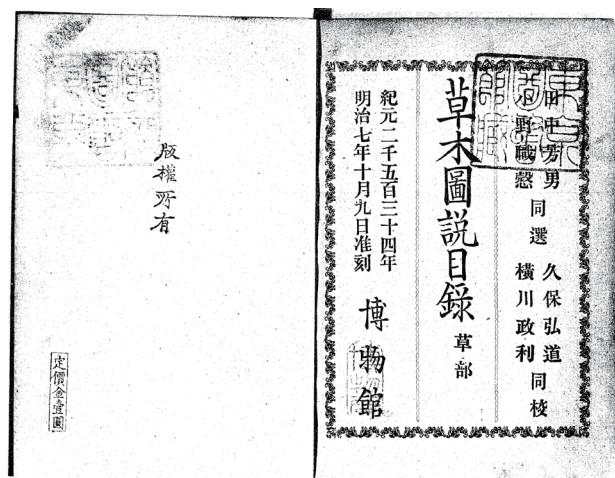


図3 『草木圖説目録 草部』

(国立国会図書館デジタルコレクションより)

<https://dl.ndl.go.jp/pid/832546> (2025年3月20日検索)

ただ、国立国会図書館所蔵の『草木圖説目録 草部』(田中芳男ほか選)は明治7年10月9日准刻であり、さらに明治8年7月の記載もあるが、ともに明治8年9月3日の出版条例改正以前である。そこに「版權所有」と「定價金壹圓」のそれぞれ印と思われるものが認められるのだが(図3)、つまり条例改正以前に出版されていても、その後「版權所有」や「定價」が押されていることがわかり、印は後で押されることが往々にして見られるというわけなのだ。

ということは、國學院資料も「版權所有」印の故に明治8年以降とは必ずしも言えるものではなく、また岩瀬資料からしても、当該錦絵の製作は明治5年と考えても良いのではなかろうか。

それにしても、いつ売っていたのか?どこで売っていたのか?文部省博覧会での販売が考え得るのかもしれないが、それも推測の域を出ず、飛躍し過ぎとも思う。

このように同じ図案の錦絵とは言え、後の押印など細かいところでの相違があるわけである。今回正確な製作年は明らかにし得なかったものの、さらに調査研究の上、正確を期したいと思う。

註

- (1)「辛」は、実際には「立」の下に「キ」の記載。
- (2) 橋爪紳也監修 2021『博覧会の世紀 1851-1970』青幻舎、53頁参照。
- (3) 国文学研究資料館のWebサイトのコンテンツ「国書データベース」で閲覧可能(以下リンク参照)。(https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100388227/2?ln=ja [2025年3月20日検索])
- (4) 副田一穂・塩津青夏編 2023『幻の愛知県博物館』幻の愛知県博物館展実行委員会、22頁参照。
- (5) 現在は山本個人の所蔵であるが、國學院大學に当時の資料を出来る限り揃えて残すことを考えているので、便宜的にこのように称しておく。
- (6) 東京国立博物館編 1973『東京国立博物館百年史』
- (7) 大谷卓史 2013「明治時代における版權と著作権」『情報管理』56巻2号(https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/56/2/56_120/_pdf/-char/ja [2025年3月22日検索])

【付記】『学会ニュース』150号記念ということで、約150年前の資料に思いを馳せて執筆した次第。

(山本哲也 國學院大學)

委員会議事抄録

【2024年度 第4回定例委員会】

2024年3月10日：オンライン（Zoom）

出席者：半田、芦谷、内川、粕谷、金山、菅野、栗原、五月女、佐藤、島、下湯、高田、高橋、並木、持田、山本
議 事（議長：半田会長）

- (1) 2025 年度第 52 回総会・第 51 回研究大会の開催について
第51回研究大会の開催形式をハイブリッドとすることを決定、スケジュールについて確認した。
- (2) 2024 年度第 2 回・第 3 回研究会の支出について
第2回・第3回研究会の開催に係る予算の執行について、原案の通り承認された。
- (3) 後援依頼について
他団体からの後援依頼について、承認された。
- (4) その他
『学会ニュース』150号及び『全日本博物館学会創立50周年誌』について確認があった。

会員情報

入会者（正会員9名・2024年4月時点）

青木 里紗	大塚 秋時	小瀬戸恵美
侯 冰倩	後藤みわ子	高橋 史弥
坪井 栄佑	橋本 雄太	村尾 優華

退会者（正会員4名・2025年2月時点）

足立 拓朗	杉山加須美	杉山 岳弘
菱木 風花		

退会者（賛助会員1団体・2025年2月時点）

株式会社五藤光学研究所

会員数（2024年4月時点）

一般会員（学生会員を含む）	483 名
賛助会員	10 団体

お知らせ 学会からの通知方法について

本学会では、通達事項は基本的に郵便物で発送しておりましたが、昨今の物価上昇に伴う経費削減と将来的なデジタルトランスフォーメーションの導入を見据えた事務局の負担緩和のため、刊行物等一部を除いて段階的に電子メールによる連絡に切り替えることといたします。

つきましては、学会にメールアドレスを登録されていない方、転職・異動等に伴いメールアドレスを変更された会員におかれましては、事務局のメールアドレス（jimu@museology.jp）まで登録のメールアドレスをご連絡いただきますようお願い申し上げます。